

## 民衆の良心としての作家

アルバート・マルツ著

坂 本 肇 訳

1902年、アナトール・フランス(1844—1924)は、エミール・ゾラ(1840—1902)の棺のかたわらでこういった。「ゾラはりっぱな人だった。偉大な魂のもつ率直さと単純さを持っていた。それに道義をはっきりとわきまえていた。晩年の著作で、かれは人類への熱烈な愛を心から表明した。よりよい社会の来ることを予言し、洞察しようとするのだ」<sup>(1)</sup>と。かれはそう話したすこしあとで、フランス全土を揺さぶり、誹謗の中心人物アルフレッド・ドレフュス(1859—1935)の無実を確定した大きな政治闘争で、ゾラが果たした役割を思いおこしながら、この作家の葬儀に参列した何千という会葬者につぎのようにいった。

「うらやましいではないか。ゾラは、巨大な作品と偉大な行動とで祖国と世界に名誉を与えた。うらやむべきは、かれの運命とその勇気である。それがかれを偉大にした。かれは人類の良心のモメントだった」<sup>(2)</sup>と。

これは心からの賛辞である。なんと意味深いことばだろうか。このコメントは生きつづけて、われわれにまで伝わった。しかし、われわれは今日、あまりに安易にこのことばを口にしていないだろうか。ゾラが誹謗と憎悪の中で、どれほどの犠牲を払って、どのような努力をして、どのような決意をもって、「人類の良心のモメント」とよばれる権利を勝ちとったのかをわれわれは忘れていいる。当時、ゾラほど嫌われ、悪しざまにいわれたものはいなかった。ゾラを偉大な作家として認めること、ドレフュスを潔白と認めること、ドレフュスの弁護に当たったゾラの役割を支持すること、これは今日ではとてもたやすいことである。しかし、その当時だったら、われわれはなんといったらだろうか。もしわれわれがゾラと同時代人だったなら、そして政府の役人たちがかれを嘘

つきよばわりし、軍の将軍たちが反逆者あつかいし、新聞や雑誌が言葉をねじまげ、ゾラの真意について嘘をいって、外国権益の代理人だと主張していたときに、われわれはゾラを支持するために前に進み出たのだろうか。身の安全のために自分の家で眠ることもできなかったゾラの友人になっただろうか——かれがリンチされるのを力をもってしか防げなかったような場合がなんどもあったときに、われわれはすこしでもボディガードをつとめたのだろうか。そして、かれが法廷侮辱罪で有罪となり、禁固一年の刑を宣告されたとき、われわれは異議を唱えただろうか。それとも沈黙をまもっただろうか。これはまさに今日的な問題である。

ゾラは孤立していなかった。フランス国内にも国外にも味方がいた。ゾラのために嘆願書の署名を戸口から戸口へと集めて回ったのは、若い学生マルセル・ブルースト（1871—1922）だった。科学者や文学者は、かれを支援するために前に進み出た。フランス、そして世界は、ドレフュス事件で二つに分かれた。アントン・チャーホフ（1860—1904）は手紙に書いた。「わたしたちにとっての時事問題は、ゾラとドレフュスだけだ。…ゾラは3ヤードも成長した。…そして、フランス人はだれも、地球上になお正義があることを知ったのだ」<sup>(3)</sup>と。

「人類の良心のモメント」とよばれるゾラの権利が、高い代償を払ってかちとられたものであることは明らかである。真理と正義のために、ゾラは財産、名声、安全、個人的自由を賭けた。かれは勝利した。われわれはかれに敬意を払う。

だが、ここに問われねばならない問題がある。「ゾラにとって、ドレフュスとは何者だったのか」ということだ。ゾラは弁護士でも政治家でもなく、一人の作家だった——悪魔島に流された男を弁護するのに、かれはまず何をしなければならなかったか。ドレフュスが無罪だろうと有罪だろうと、ゾラは本を書くことができたではないか——いや、そのように思われるのだ。ゾラはおせっかいやきだったのだろうか——それとも売名行為をしたのだろうか——あるいは社会主義の理想のために、すぐれた文学的才能を心得違いにも悪用した作家だったのだろうか。かれの行動を説明するものとして、このようなことがいわれた。

真実は何か。それはもちろん、こうだ。アルフレド・ドレフュスの運命に無関心のままで、ゾラは安らかに本を書くことはできなかったということである。ゾラという作家には人間ゾラがいっしょになっていた。明らかにこれは全ての作家にいえることだが、同情のまなざしでフランスの坑夫を詳細に描写した作品、『炭坑夫』を書いた著者は、ドレフュス弁護に駆り立てられた人間と同じ人間だったのである。

ゾラの人生と作品は偶然のものではない。また、文学史のなかで風変わりなタイプというわけでもない。生涯を通して、または生涯のある時期に、才能のおよぶかぎり人類の良心のモメントたろうとした数多くの作家たちから、ゾラが区別されるのは、ひとえにかれの作品が成功を収め、かつすぐれているからにほかならない。

これらのどれ一つとして偶然ではない。それは創作過程の本質、作家の本質、そして人間の本質から生まれるのである。

私は、芸術が一種類の知性や感受性からだけ生みだされるものかどうか——芸術には創作方法や問題関心がただ一つだけあればいいとか主張しているわけではない。人生と人間にたいする焼きつくような憎悪から本を書き、その本のページには冷笑、毒気、絶望が燃えたとっているような作家が、数は多くないが、何人かいた。それらの作家の本を読む読まないは、読者の好みのみである。彼ら作家にそれなりの洞察力がないわけではない。読むに耐える内容であればということだが、彼らの抗議にも意味はある。

市民としても作家としても、遍狭に自分のことにしか関心をもたない作家がいる。彼らの文学上の業績や社会的な地位を否定することは、大きな誤りを犯すことになるだろう。われわれの社会は複雑である。神経過敏なあまり同時代の人びとと調子を合わせることができず、あわれにもナルシズムに落ちいった個人の叙情的な叫びから、またとない秘蔵の文学作品が与えられることもわれわれは知っている。

また、生活の上だけでなく作品のなかでも、事件、人間、時代にたいしてか

たよりのない冷淡さを特徴とする作家もいる。かつてサマセット・モーム（1874—1965）は、自分が真の大作家になれないのは、人間をあまり好きでない点にあると書いていた。もしかして後世になると、モームが自作をそのように評価したのは誤りだということになるかもしれない。しかし、いまの時点でモームが自分の気質について残念そうにコメントしているのが関心を引く——かれは審美主義を全面に押し出してはいない。この点で、今日、かなりの数にのぼる、知性と善意をもち、りっぱで有名な文学の権威者たちと、かれは見解を異にしている。文学の権威によると、真の芸術家の基準は社会の出来事にたいし冷淡に公平無私に接することにあつたし、いまもそうなのである。実のところ、同時代の出来事にたいしてまったく関心を示さないのを特色とする作家もいる。これは彼らが気質的にそういう人間だったということなのであり、その作品については何を描写しているかで評価することにした。

しかし文学のあらゆる歴史に当たると、不偏不党、公平無私、冷淡無比の美学をうち立てようとするものは退けなければならない。このような美学の持ち主は、自分がしきりに讃える作家の記録や生涯そのものを無視することによってだけ存在しているからである。「人生をしっかりと見すえ、それを丸ごと捕らえる」という言葉は、彼らによって人生をガラス窓の外側から眺めるといふ行為に変えられてしまった。好奇心を誘う人形芝居のように人生を見つめて、それを描くだけになったのである。確かに、それはおもしろい。だが、人間の行動は現実である。笑い声や苦悶する声は心の中からほとぼしるし、殴られると血も出る——人生は操り人形の見せ物ではない。おおかたの作家にとって、人生は人形芝居ではなかった。彼らは行動のもたらすものに無関心ではなかった。

文学の歴史は、民衆にたいする同情と愛情とをひとときわ抱く作家たちの生涯と作品でたいていは占められる。彼らは冷笑的な態度をとるよりもむしろ、当時にあって進歩的な、多くの場合に急進的な社会運動を党派的に支持することでひとときわすぐれている。これがあらゆる文学を網羅した完璧な歴史というわ

けではないが、記録に残っているものとしてはもっとも有力な傾向である。それ以外にどのような文学史があるだろうか。人間である作家は、ほかの人の苦悩に心を動かされてきた。作家は自分と同じ人間の人生のほかに、なにを素材として書くことができるだろうか。心が同情にあふれ、精神が好奇にみち、眼が事物を見通すことができるなら、どうして作家はこの不完全な世界を描写しないですますことができるだろうか——心はよりよい世界を望んでいるのに、どうしてそれを閉ざすことができるだろうか。作家が書きはじめてこのかた、人間は動乱の中にあつた。世界は激しく揺れ動いてきた。一日として静かな日、一日として人間の苦悩のない日、一日として人間の心が希望をもって変革を夢見なかった日はなかった。

世界文学の多くがこのような基礎の上に生まれた。そこからまた、今日、ほとんど知られず記念されてもないが、過去の文学者の多くが男女を問わず、当時評判の悪い主義主張のゲリラ戦士だったという事実が生じた。彼らは公平無私とか不偏不党といった態度ではなく、きわめて旺盛な党派精神、すなわち、正義、真理、貧しいものの大義、苦しめられ悩めるものを守る闘いにおいて市民作家、戦闘的作家としてのキャリアを送ったのだ。文学上の偉人のリストには、その時代に検閲の対象になったり、社会的な過激派になったり、警察の調書の材料になったり、中傷、嘲笑、不当な勧告などを受けたりした人の名前がいっぱいある。これらの先駆者は、みんながゾラのような人というわけではなかった。嫌気がさしたり、一人よがりになったり、おじけづいたりした。とはいえ、彼らが挑戦的な勇気で警察の調書をものともせず、不屈の威厳で中傷の矢面にたち、不当な勧告を受け入れなかったのは、多くのものにとって名譽となるものだ。ところで、もし各時代の文学や政治畑の保守主義者がそれなりの文学史を書いたなら、いつの世代の作家も、社会的に関連したひと続きの腐敗や墮落におどろくほど苦しめられたということが示されるのではないか。そして、この腐敗墮落を表すものとして、つぎのようなものが列挙されるだろう。時の権力にとって、異常な容認し難い、またはいっそう有害で評判のよろ

しくない——というより過激きわまる思想にこりかたまっていること。物を書く机から離れて市場で市民たちと、ことに反政府的な野党のメンバーと談合するという墮落。人間にありがちの不正に直面して、不作法にも口やかましく、感情をあらわにするという墮落。信念を抱き、それに一定の勇気をもつという腐敗。このような腐敗墮落のあらゆるものが、まさに今日、われわれが彼らを賞賛する理由なのだ——彼らはそのように生きてだけではなく、そのように書いたからである。

ここに一つの記録がある。ほとんど知られることなく、ほとんど讃えられることもないが、これまでずっと覆い隠されていたのである。いま1947年、このアメリカの作家の集会で、上にたまった埃をはらって、記録に賛辞を表すのは当を得ているだろう——賛辞はわれわれ自身の魂のために表さなければならないからだ。これは、知る知らないにかかわらず、われわれの遺産である。われわれが今日ものを書くことのできる理由の一つなのだ。この遺産は、厳しい冬の時代に身体を暖める繊細なウールのショールみたいなものだと考えてみたい。われわれは一人残らず、闘いのさなかにある。過ぎ去った世紀を一瞥すると、新たな展望が開けるかも知れない。

1863年、奴隷制廃止論者だったボストンの商人、ジョージ・スターンズは、隊長ジョン・ブラウン（1800—59）の胸像を、すぐのちにブラウンは犯罪者として絞首刑に処せられたが、その胸像をヴィクトル・ユゴー（1802—85）に送った。どうしてユゴーに送ったのか。それは、当時のユゴーは1848年の共和派の武装蜂起に関係した結果として、王党派フランスから17年間の追放処分をくっていたからである。かれは熱烈な民主主義者として民衆のスポークスマンをつとめ、南北戦争では奴隷制に反対した北部を支持していた。ユゴーは市民作家であり、この数年後には、パリコミュンの犠牲者を支援することになるのである。

19世紀もはじめ、1828年にミラノの警察署長は、町に着いたばかりのアンリ・ベールという名前のフランス人についてウィーンへ報告書を送った。アンリ・ベールのペンネームはスタンダール（1783—1842）だった。この『赤と黒』の

著者が、「きわめて言語道断な態度でオーストリア政府(当時イタリアを支配)にたいして」無礼をはたらき、「宗教に害をなし、不道徳はなはだしく、王制にとって危険この上なく」、「すこぶる有害な政治思想」の持ち主として報告されたのである<sup>(4)</sup>。スタンダールは以後、ロンバルディの領地へ二度と入るのを禁じられた。

ヨーロッパの一流の詩人バイロン男爵(1788—1824)が、ギリシア独立のために戦う革命軍へ義勇兵として参加しようとギリシアへ行き、そこで死んだのは、この警察の報告書が作成される4年前のことだった。想起こすなら、現代でも、同じようにイギリスの作家が義勇兵としてスペインで戦死している—ラルフ・フォックス(1900—37)、ジョン・コーンフォード(1915—37)、クリストファ・コードウェル(1907—37)がそうである。

ここでバイロン、ゾラ、アナトール・フランス、スタンダールたちについて考えてみよう。だれかがわれわれに信じさせようとしたように、彼らの作品は、社会正義にたいする情熱にもかかわらず、偉大なのだろうか。それとも情熱のために偉大なのだろうか。

レオ・トルストイ(1828—1910)の妻が、差し迫った夫の投獄を未然に防ごうとしてツアーに使いをだしたのは、19世紀も終わりの1891年のことだった<sup>(5)</sup>。なぜ使いをだしたのか。ロシアの各地方で飢饉が起こっていたのだ。ところが、それは国家秘密にされて、ツアー自身がどこにも飢饉はないと言い張っていた。ツアーはうそをついていた。トルストイは真相を書いて出版したが、国内で発禁処分になった。それで外国で出版したところ、内務大臣は、おとなしくしないなら獄中に繋いでやるといった。新聞はトルストイを攻撃し、文部大臣はモスクワ大学でかれの作品が講義されるのを禁止し、スパイは身边を監視し、中傷をこととする御用作家は罵倒のかぎりをつくした。

トルストイがロシアの民衆を支配する権力に反抗したのは、これが最初でも最後までなかった。そのことは、同時代のほかの作家についてもそっくり当てはまる。19世紀ロシア文学の偉大な作品は、人生を人形芝居とみる冷ややかな

傍観者によって書かれはしなかった。この時代の警察の調書がそれを別なやりかたで示している。革命活動のためシベリア流刑を宣告——大学生、フョードル・ドストエフスキー（1821—81）。革命活動のため懲役を宣告——小説家・劇作家、マキシム・ゴーリキー（1868—1936）。危険な政治家を自宅に迎え入れたので逮捕——レオニード・アンドレーエフ（1871—1919）。芸術文学アカデミーから脱退——アントン・チェーホフ、同アカデミーからマキシム・ゴーリキーを除名するようというツァーの命令に抗議する。

以上は、19世紀のヨーロッパの作家に関する記録の一部である。わが国では、事情は違っていたらろうか。エマソン、ソロー、ウィリアム・カレン・ブライアント、ロングフェロー、ホイットィアなど——彼らの作品は教科書に取り入れられて、どこの公立学校でも使用されているが、どんな悪臭も彼らの名前には付いていない。きれいにクリーニングされてしまっている。

かつてのよき社会では、彼らの名前は悪臭を放っていたのだ。1825年から1860年にいたる厳しい時期に、北部の州においてさえ、奴隷解放論者であることがどんな意味をもっていたか想起させるだろうか。奴隷制に反対する集会は暴徒によってめちゃくちゃにされた。奴隷解放論者は殴られたり、殺されたり、リンチされたりした。新聞編集者のウィリアム・ロイド・ギャリソン（1805—79）はロープで縛られ、ボストン市中をひきずりまわされた。ラヴジョイ師（？—1837）は撃たれて死んだ——奴隷制度に反対することは中傷、侮蔑、誤解、排斥、暴力を一身に引き受けるということだったのだ。以上のようなことをわれわれは知っているだろうか。

もしこういうことを全て知っているならば、つぎのような作家たち、すなわち、沈黙をきめこまず、無関心な態度をとらず、よい評判が傷つくのもかまわないで、必ずしもお上品とは限らなかった作家たちの点呼をとることができるというものだ。

ジョン・グリーンリーフ・ホイットィア（1807—92）——最初の詩はギャリソン編集の新聞に発表される。奴隷解放を唱える予言者的詩人で、いわゆる法



破りたちの擁護者として、一編の詩を「奴隷制権力にたいする反逆罪のため逮捕された友人に」捧げる<sup>(6)</sup>。

リチャード・ヘンリー・デyna (1787—1879) — 『水夫として2年』の著者で、作家兼弁護士。逃亡奴隷や、逃亡奴隷を助けた罪で逮捕された人を法律的に弁護する。

ヘンリー・ソロー (1817—62) — 奴隷制に反対するボストン市民を守る会のメンバーで、非合法の「地下鉄道」を使って逃亡奴隷がカナダへ逃げるのを助ける。奴隷制に抗議して税金の支払いを拒否する。温厚な人柄で、引退生活をしながら『ウォルデン』を書き、みずからコンコード教会の扉を開き、暴行を加えられる恐れがあるという警告にもひるまず、説教壇から「ジョン・ブラウン隊長のための弁護」をする。

ウィリアム・カレン・ブリアント (1794—1878) — 新聞の編集をするかたわらに詩作。熱烈な奴隷解放論者で、賃上げ要求のストライキが違法な共同謀議だとされる時代に、労働組合の権利を擁護する。

ウォルト・ホイットマン (1819—92) — ラディカルな意見のためにブルックリン・ディリー・イーグル紙編集者の職を解雇される。逃亡奴隷法案が可決されたことに怒りを爆発させ、はじめて詩「ブラッドマネー」を書く。

ジェームズ・ラッセル・ローウェル (1819—91) は奴隷解放論者。ヘンリー・ワズワース・ロングフェロー (1807—82) も同じ。奴隷制に反対したジャーナリストを親にもつウィリアム・ディーン・ハウエルズ (1837—1920) は労働組合を支持し、帝国主義に公然と敵対的態度をとる。トルストイやゾラの弁護もする。

ここで、ジョン・ブラウン隊長に資金援助をしたある人物についてすこしだけ時間を割いてみよう。その人物は、ブラウンが絞首刑に処せられた当日、絞首台は十字架のように神々しいと語ったのだ<sup>(7)</sup>。奴隷制に反対するボストン市民を守る会の指導的メンバーであり、「地下鉄」組織で逃亡した名うての奴隷、その崇高な黒い首に賞金を懸けられた犯罪者、ハリエット・タブマンを自宅に

かくまったりもした。演説家、扇動者、社会の危険人物——これがラルフ・ウォルドー・エマソン（1803—82）の記録である。

このような人たちが、われわれに文学的遺産を残してくれたのである。われわれが今日知っているようなアメリカの国民的な良心も少なからず彼らから——その作品、生涯、情熱から受け継いでいる。けれどわれわれは、逃亡奴隷法が議院を通過したさいにヘンリー・ソロウがいったつぎの言葉を忘れてはならない。「われわれは受け継いできた自由をみんな使い果たした。もしわれわれが生活を守ろうと思うなら、そのために戦わなくてはならない」と。わがアメリカの作家はみんな、この言葉を座右の銘にして、じっくり考えようではないか。

わが国の歴史を読んで、エマソンが1856年にフィラデルフィアで演説を禁止され、また61年にはボストンで暴徒に妨害されて演説できなかったということに気づいたら、われわれは、今年1947年に、ポール・ロブソン（1898—1976）がイリノイ州のペオリアや、ニューヨーク州のオールバニーで演説する権利を否定されたことに激昂するだろうか。

ウォルト・ホイットマンの詩「ブラッドマネー」を読むと、われわれは、このホイットマンならタフト・ハートレイ法にも憤慨したろうかと尋ねるだろうか。われわれは怒りを覚えるだろうか。抗議するだろうか。われわれは力を結集して、この法律を廃止しようとするだろうか。

1947年、ハワード・ファスト（1914— ）の情熱あふれるすばらしい小説『市民トム・ペイン』がニューヨークやデトロイトの公立学校の図書館で禁書にさせられたと知ったとき、われわれはいやな気持ちになって動揺するだろうか。それとも抗議の声をあげるだろうか。

ボストンで奴隷制度を廃止する委員会のメンバーに、エマソンの友人の一人でサミュエル・ハウという医者がいた。かれは若いとき、パイロンのように義勇兵としてギリシア革命軍に参加し、軍医長をつとめた。われわれはかれに敬意を払う。ところで今日、ニューヨークのエドワード・バースキー博士にも、

同じ敬意が払われるべきだというのは難しいだろうか。かれは10年前、スペインで共和派軍に義勇兵として参加、軍医長をつとめたことがある。先日、このバースキー博士が議会侮辱罪を宣告されて、一年の禁固刑を受けなければならないということをわれわれは知っているだろうか<sup>(8)</sup>。

われわれは作家だ。ゾラに敬意を払い、芸術を大事にし、自由を愛する。それならわれわれは、ニューヨーク大学のライマン・ブラッドレイ教授——そのほか9名の医者、弁護士、主婦、労組のオルグ——のような人たちが同じように議会侮辱罪に問われ、いま投獄されていることについて何というべきだろうか。

そして小説家ハワード・ファストがこの中において、禁固一年の刑に服さなければならないという事実について、われわれは何といえよだろうか。ファストは、わが国の歴史上どの作家よりも、民主主義にたいする賛歌を小説のなかで歌ってきた。このかれに刑務所の扉が迫っているとき、われわれは何といふべきだろうか——ゾラを讃え、ドレフスが無実だったのを知っているわれわれとしては。

この11名の男女に、どういう罪があるだろうか。彼らは、フランコ体制から亡命したスペイン人に救援活動を行っている慈善団体「反ファシスト亡命者合同委員会」の役員である。これが彼らの犯罪、ほんとの罪状なのだ。表向きの非難としては、委員会の会員名簿を彼らがランキン＝トーマスの非米活動委員会に引き渡すのを拒否したことが挙げられている。

わが国でくずのような政治ごろが議会の席にすわり、善良な市民を脅迫する権力を与えられているとは、われわれ国民の生活のなかで何ともおぞましい光景ではないか。

この11名の人々は脅迫をはねつけた。アメリカを一大強制収容所にかえようとし、社会全体に中傷と人種の憎悪の毒をまきちらし、アメリカでの全ての腐敗と害毒をそのまま体现している連中のいいなりにならないで、彼ら11人はファシズムに反対する人の名前を引き渡すのを拒否したのだ。たとえどんなに多くの

法廷や陪審がハワード・ファストやその仲間に有罪の宣告を下したとしても、ファストたちには、人間の品位こそあっても、どのような罪もありはしない。

いつの時代もそうだが、今日、市民は自分の歩む道を選ぶように迫られている。これは厳しい問題で、もっと楽な世の中になればよいものだ。が、問題がなくなることはないように思われるし、われわれ作家も道を選ばなくてはならない。ハワード・ファストが有罪を宣告され、禁固一年の刑を受けるとき——ランキンの影は全てのアメリカの作家の机上に迫っていたのだ。影はひとりで消えることはない。アメリカの誠実な文学者は男も女も、こぞって自覚すべきときがきた。もし自由な思想が大切な遺産なら、いまからそれを擁護しなければならぬ。もしわれわれの多くが独善的になったり、あわてふためいたり、「ラディカル」という古くからの声にわけもなくびくついたりすると、その遺産を所有しつづけることはできないだろう。われわれが賞賛する過去の文学者は独善的になったり、あわてふためいたりしなかったし、おじけづくこともなかった。

ゾラは名誉棄損の裁判でこういった。

「だれもが私に反対しているように見える。両院も、市当局も、軍隊も、大新聞も、権力に毒を盛られた一般大衆の意見もそうである。私には理想、真理と正義の理想のほかには何一つとしてない。それでも私は落ち着いている。私は勝利するだろう」<sup>(9)</sup>

そして、ギャリソンは『解放者』の創刊号につきのように書いた。

「私は真理のように厳しく、正義のように頑固になろう。．．．私は真剣だ——あいまいな態度はとらない。弁解はしない。一インチたりとも後退はしない——そうすれば私のいうことを聞いてもらえるだろう」と。

これがわれわれの遺産だ。われわれは、自分が継承したものを守り、豊かにし、つぎの世代へ伝える義務がある。そうすることではじめて、われわれは作家の名前に値するものとなるだろう。

アルバート・マルツ「民衆の良心としての作家」(坂本 肇 訳)

〔原 注〕

- (1) Matthew Josephson, *Zola and His Time* (New York), p.509.
- (2) *Ibid.*, p.510.
- (3) *The Life and Letters of Anton Chekhov*, tr. and ed. by S. S. Koteliansky and Philip Tomlinson (New York), p.253.
- (4) Matthew Josephson, *Stendhal* (New York), p.319.
- (5) Ernest J. Simmons, *Leo Tolstoy* (New York) を見よ。
- (6) *The Democratic Spirit*, ed. by Bernard Smith (New York), p.236.
- (7) Henrietta Buckmaster, *Let My people Go* (New York), p.269.
- (8) 本講演の発表後に、パースキー博士は6ヵ月、ほかの仲間は3ヵ月の入獄を宣告された。現在、彼らは連邦最高裁に控訴中である。
- (9) Matthew Josephson, *Zola and His Time*, p.462.

〔解 題〕

ここに訳出した Albert Maltz, “The Writer as the Conscience of the People” は1947年7月11日、「アメリカの進歩的市民からなる芸術家・科学者・専門家会議」の後援で、合衆国における思想統制に関する会議がロサンジェルス・ビヴァリーヒルズ・ホテルで開かれたとき、文学部門の討論会の席上で発表されたものである。本訳の底本として、*The Citizen Writer: Essays in Defense of American Culture* (New York: International Publishers, 1950) を使用した。

訳文中の人名には、括弧で生没年を付した。